

《国際シンポジウム報告》

日本研究学科創立25周年記念シンポジウム・
東南アジア日本研究学会会議
(国立シンガポール大学) に参加して

小林 聡 明

2006年10月12日から14日まで、国立シンガポール大学において日本研究学科創立25周年記念国際シンポジウムと東南アジア日本研究学会会議が開催された。

12日から始まったシンポジウムでは、まず国立シンガポール大学日本研究学科長のThang Leng Leng氏や駐シンガポール日本大使のKojima Taka-aki氏らによる挨拶のあと、5人の招請者による講演が行われた。以下、講演者とタイトルについて記しておく。

J. A. A. Stockwin (Nissan Institute of Japanese Studies, University of Oxford)

Politics, Japan and the Politics of Japan: Studying at an Intersection of Disciplines

Naoki Sakai (Department of Asian Studies, Cornell University)

Civilisational Difference and the West: Contemporaneity in Knowledge Production on Japan

Patricia Steinhoff (Department of Sociology, University of Hawaii at Manoa)

Through the Looking Glass, Refracting America through Japanese Studies

Tamotsu Aoki (Organization for Asian Studies, Waseda University)

The Sun, Jazz and Haruki: From the "Study of Other Cultures" to "Perspective of Cultural Contemporaneity"

Peter Drysdale (Australia-Japanese Research Center, Australian National University)

Japanese Studies in Australian and New Zealand Universities

13日および14日の両日にわたって開催された会議では、7つのセッションに分けられた27のパネルから構成され、発表者だけでも103名を数えるほど大規模なものであった。各パネルのテーマは、外交や安全保障政策などの政治分野をはじめ、経済や歴史、言語や文化、芸術まで多岐にわたっており、地域研究者が集う学会ならではの特色を示していた。また、シンガポールという開催場所の地域的な特徴も反映して、日本と東南アジア諸国との関係に照準した研究や、日中関係に関する研究も多々みられた。

同会議では、科研プロジェクト・基盤 (A) (1) 「17-20世紀の東アジアにおける『外国人』の法的地位に関する合的研究」(代表：貴志俊彦) がPanel 1C 「De-imperialization and

Decolonization in East Asia, 1945-1946』と題されたセッションを組み、報告者として貴志俊彦（島根県立大学）、川島真（東京大学）、小林聡明（日本学術振興会）の3名が参加した。

同パネルは、13日午前10時20分から開始され、司会はシンガポール大学歴史学部のTeow See Heng氏が行い、報告者は私たち3名であった。各報告は、プレゼンテーション20分と討論10分のあわせて30分間で構成された。

最初に貴志俊彦が「The Establishment of Telecommunication Sovereignty in Japan and China after World War II」と題する報告を行った。貴志は、まず1945年の「終戦」が、東アジア諸国にとって、脱帝国化、脱植民地／半植民地の起点になったものの、各国が即座に国家主権を確立させたわけではなかったことを指摘した。そのうえで、報告では、戦前、戦後の日中間の海底ケーブルをめぐる多国間交渉を通じて、日本が1954年5月に、中国が1961年12月にそれぞれ通信自主権を確立したプロセスを解明し、戦後復興と国家主権の確立をめぐる諸問題を浮かび上がらせ、検討した。

次に川島真が、「‘De-imperialization’ in Japan: 1945-1952」と題する報告を行った。川島は、戦後日本は、脱帝国化を目指したが、東アジア研究では、脱植民地化をめぐる議論が活発に行われたものの、日本の脱帝国化に関する議論はほとんどなされなかったことを指摘した。こうした批判にたち、報告では、①資格、②帝国から列島への日本人の引揚げ、③台湾と他の地域との新たな関係の再構築、④国籍とアイデンティティの概念の新たな作り直し、⑤新たな歴史の創造と公的記憶の形成の観点の5つの観点から日本の脱帝国化過程の諸側面について検討した。

最後に、小林が「The Postcolonial Origins of the Korean Postal Censorship System under Rhee Syngman Government」と題する報告を行った。小林は、李承晩政権期に実施された郵便検閲体制が、植民地朝鮮での検閲体制といかに連続性を有しているかを明らかにした。同報告は、植民地体制－米軍占領体制－南北分断体制という時間的な流れのなかで、李承晩政権期における検閲体制の動態を位置づけ、検討しようとするものであった。

以上3名の報告のあと、全体討論が30分間行われた。ここでは、各報告者に対する質問や、また各報告者が持ち時間のなかでは十分に提示しきれなかった論点や補足説明が行われるなど、活発な討論が行われた。全体討論終了後も各報告者と参加者の間で個別に意見交換がなされるなど、本セッションは盛況のうちに終了した。

なお、セッション終了後、報告者3名はシンガポール国立図書館で資料調査にあたり、本館には多数の華僑・華人関係の新聞、書籍が所蔵されていることを確認した。これは、上記の科研プロジェクトにきわめて有用性が高いものであろう。

(KOBAYASHI Somei)